定年退職なさる先生がたからのメッセージ

大学を去るにあたって

菊地　弘

明年定年を迎える私にとって、人生の半分を送った跡見学園は、なにより親しい。

小石川区（現文京区）の旧細川侯爵邸の近くで育った私は、小学校四、五年生の頃、しばしば東京大学医科分院の前の道を歩いて、ゆるやかな坂道を講談社の傍へとくだって、音羽通りを越え、向かいの小日向へ、今度はいくぶん急な坂道をのぼって遊びに行ったものである。坂の右側には、附属中学校の建物が建っていたが、そのあたりには大きな銀杏の木が聳え、笹の生えた原っぱもあって、子供たちの遊び場に格好な場になっていた。冬の日に暮れ方まで駈けまわって遊んだことなどが、なつかしく甦ってくるなかに、跡見女学校の建物や、たしか東洋文庫だったと思うが、反りを打った屋根の建物が、霧のなかから薄っすらと現れてくるように思えるのである。後に大学に奉職することになったが、私はその時分から跡見学園と不思議な縁に結ばれていたような心もちになるのである。そして、みずから学び、いまだ勉強しつづけている文学をもって学生に接して今日に及んだということに、この上ない喜びを覚えるのである。

今日、過ぎ去った歳月をふり返ってみると、親しさとなつかしさのうちに消え去ってゆくものと、いきいきと甦ってくるものとがある。甦ってくるものは何かと、私に問うのであれば、わが三七九研究室の私をさ

さえてくれた静寂な空気である。それは慰安を与えてくれると同時に、心熱を燃えあがらせてくれるものでもあった。また、わがゼミの情報誌『きくりん通信』を編集し、発行するために集まってくる学生たちの嬉嬉とした声である。『きくりん通信』は、二〇〇二年三月で、第七次をもって終刊した冊子であるが、三年生のゼミがそのまま四年生のゼミに連続する形態のなかで、親睦、交流をはかる目的で始った。三年生はゼミでお互いに初めて知り合うことから、紙面で自己紹介し、趣味や特技を語り、秋はゼミ旅行で詠んだ短歌や俳句を載せる。四年生は、卒業論文作成にあたって、どこの図書館が文献も多く、利用し易いか、就職面談でどのような質問をされたかなど、情報を寄せ合って冊子をつくる。三年生と四年生は冊子を交換して、親交を深めたようだ。二十五平米の研究室に据えてある二つの机は彼女たちに占有されることがしばしばであった。時に、彼女たちはアンケート、あるいはインタビューの名で私を窮地に陥れた。「文学を研究する動機は何ですか」、「血液型は何型か」、「恋愛結婚ですか」などなど。彼女たちの編集に容喙をしないと言っていた私は、容赦ない問に困惑するのであるが、いつのまにか、彼女たちの興味にこちらの呼吸がとけあって、ほほえみたくなるのであった。

また、季節を問わず、研究室の窓から見える風景は、窓枠が額縁と変わって折おりの小さい絵となって鮮かに浮かびあがって、目を見張らせられるのである。三月から四月は李や山桜が咲き、紅色、薄い桃色、白い色など多彩のなかに木々は「個性の色」を見せてくれるのである。やがて花吹雪に見舞われ、五月の新緑を迎えると、燕がゆるやかに一羽、二羽と翔ってゆく。向うの小丘に白壁の建物が強い太陽の光を受けて輝いているようにみえる。ウォーター・オブ・ライフと呼びたくなるような気持ちに憑かれるときなのである。私はいつの間にか、この三七九研究室から窓ガラスを透して眺める彼の地を愛していたのである。目前にメタセコイアが大きく聳え、小丘に向うゆるやかな斜面に茂る雑木林が、一重二重と山脈(なみ)のように連なって見

えるなかに、赤い瓦屋根と白壁の建物が見えるだけなのだが、私の眼にはいくつかの風景画を好きなように思い浮かばせてくれるのである。

薄ら寒い秋の日が続いて、やがてまばらな枝の間から秩父の山陵が冷たい空にくっきりと見える日など、私は飯田蛇笏の句が自然と浮かんでくる。

芋の露連山影を正しうす

南アルプスの峨々たる連山でなくともよい、冷気のなかに秩父の山脈を凝視していると、猫背がピーンと弓の弦のように張ってくるのである。人生に真に迫るような感覚をもつのである。

また、ガラス窓を通した冬の風景は午前の光、午後の光のなかで熱い思いを与えてくれるのである。

澄みわたった冷たい天空に、白い三日月を眺めたとき、もの憂い、切ない思いとなるが、遥か雪を冠した山脈を見詰めると、気持がとけて、自由になるのである。

四本のメタセコイアが右の額縁のなかで三本に見える。午後の光のなかで、私はやがて耳を切ったオランダの画家を思い出す。炎の燃えさかるようなタッチで描いた糸杉の絵が瞼に浮かんで見えてくる。その糸杉の下の一筋の道――。ゴッホから茂吉に言及した芥川龍之介に倣って斎藤茂吉の『一本道』を思い、

あかあかと一本道とほりたり
たまきはる我が命なりけり
かがやけるひとすぢの道遥けくて
かうかうと風は吹きゆきにけり

と、自由気儘に感覚に酔うことにもなるのである。

また左の額縁には、裸木の間からセザンヌの絵になりそうな白壁の館、赤い屋根の建物が丘の上に見える

のである。小丘へ向けて、小路が見えかくれしている。そこへ行って言葉を交したくなるような心持になってくる。

殊に、冬の日の暮、地平に落ちてゆく燃える陽が、澄みきった空に山脈を鮮やかに浮き彫りにし、比喩を絶する色調を帯びる光景は、かえって想いと感動を静まらせてしまうのである。

ひとりこの三七九研究室から眺めたさまざまな風景は、私の自由な感覚に基づいた絵となり、愉しみを味わせてくれた。そして、幾多の小説や詩を自然と心に蘇らせてくれたのである。それらは、私の研究生活に少なからず勇気と覚醒を与えてくれた。

桜の季節を俟って私は講壇を去る。

大学を愛する故に、この三七九研究室への親しくもなつかしい思いは、終生忘れ得ないであろう。

末筆ながら、今日まで僚友諸先生をはじめ、多くの方々に支えられてきたことに深く御礼申しあげる。

于時

二〇〇二年十二月十一日